42 『頓医抄』巻第二十、口腔疾患に関する考察

戸出一郎

梶原性全著『頓医抄』巻第二十に記載される口腔疾患に関し、疾病の分類・病理論・治方・引用文献等について考察を試みた。

口腔疾患は歯諸病・口諸病・舌諸病・咽喉諸病・唇諸病に分類される。このような器官別分類法は隋・巣元方の『諸病源候論』をはじめとして、唐宋の医書一般に見られる方法である。症候の分類については別に項目を立てることなく、『三因極一病證方論』（以下『三因方』）や『活人事證方』（以下『事證方』）のように処方名を羅列して症候を述べるという形をとっている。

この分類の様式は服部敏良博士が指摘しておられるように『諸病源候論』によって部門を立てたものとはいい難く、『和剤局方』の配列にも近く、いわば両者の中間を行く編述方式で、管見によれば『三因方』が最も近いと思われる。

各疾患の冒頭にはそれぞれ病理論が記されている。それらはすべて『三因方』に基づいているが単なる直訳ではなく、多少の省略や文字の補足をして、時には自己の意見を加えて全体を意訳し、平易な言葉で分り易く説明している。

治法は『太平聖恵方』のように症候によって分類し、それに対する治方を述べるという方式をとらず、『三因方』や『事證方』のように処方名を掲げてそれに適応する症候を述べるという形をとっている。

処方数は全部で一一二方（薬方一〇七、灸方三、熔方一、咒法一）に及ぶが、中でも単方又は二剤によって構成される薬方が圧倒的に多い。薬方一〇七方のうち一・二剤をもって構成される処方は七五方（七五%）に及ぶ。この傾向は当時手に入り易い薬物を用いて、できるだけ簡便な処方を多く採用する方針によったものであろう。

引用書目については服部博士の研究書に見られるよう

に、『頓医抄』各巻で著しい相違があるが、巻第二十では病理論はすべて『三因方』から、治方は全一一二方のうち『千金方』三三方、『三因方』二一方、『王氏方』一七方、『事證方』一一方と、これら四書から引用されたものが圧倒的に多く、全体の七三%に及んでいる。他に『外台方』三方があり、その他の十書から一又は二方が引用されている。

引用書名のない処方は十三方あるが、これが性全の自家治験のものか、或は口伝・秘伝の類か俄に断定し難い。

右のように『頓医抄』巻第二十は口腔疾患の病理と治法を平易簡潔・親切丁寧に記述したもので、一読して性全が膨大な医書を渉猟し、それを自家薬籠中のものとしていたこと、更に世の口伝・秘伝をあまねく人に知らしめて天下の人を助ける志をもっていたことが感じられる。

本巻の編纂様式は基本的には『三因方』や『事證方』によっているが、それは単なる模倣ではなく、性全の広い学識と深い経験によって他に見られない個性豊かな著述となっている。

『頓医抄』巻第二十はその後の口中書に多くの影響を与えたものと思われる。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所医史文献研究室）